

『トリストラム・シャンディ』再考

—不毛の饒舌—

河村 昭 夫

1

ローレンス・スターンの『トリストラム・シャンディ』（一七五九—六七）については、従来いわゆる「逸脱」の問題が多く取りあげられてきた。絶えず話を中断させることで筋の展開を不統一なものとしている作者独特の語り口は、興に乗って先へと読み進む読者を大いに当惑させる。こうした話の「逸脱」、物事の中断には、人間は運命や偶然のなぶりものになり、先の予測もつかないまゝに生きる、愚かしくも哀れな存在なのだ、という作者の人間観が示されていると考えてよい。例えば、「自分のすることすべてに、この上なく几帳面な人間」（二—四）⁽¹⁾であるウォルター・シャンディ——語り手の父は、まさにこの几帳面さの奴隷である。彼はあらゆることに理屈をつけ、意味づけを行って、この世の中を確実に把握し、自分の手に収めようとする。こうして、まるで何かに取りつかれたかのように、むきになって考え、語り続けるこの人物の意識の底に、自分が運命や偶然に弄ばれ、なぶりものになることへの不安、ないしは拒絶の気持が潜んでいることを指摘することも可能である⁽²⁾。

それにしても、この作品に登場する人物はなんと饒舌なことか。タイトルが示すように、この作品が、主人公トリストラムの生涯と意見を自ら読者に伝えるものであるとすれば、彼が自分の生涯にかかわる事柄を細大漏らさず語るとしても不思議はない。だが、留まるところを知らないトリストラムの脱線話は、読者が予想もしない饒舌の世界を展開させる。

饒舌なのはトリストラムだけではない。彼によって語られる父ウォルターも、ひとたび口を開けば、姓名論、鼻談論、子弟教育論等々、彼一流の珍妙な意見や学説がとび出し、読者を完全に煙に巻く。叔父トウビーも同様で、聞き手にまわることの多いこの人物も、自分が負傷したナミュールの攻城戦の模様を伝える段になると、俄然言葉数が多くなり、行動的になって、城の模型作成と戦況報告に没頭する。これらの人物達の果てしなく続けられるおしゃべりはどういう種類のものなのか。作者は彼等の多弁を通して、諸者に一体何を伝えようとするのだろうか。

2

この作品に登場する能弁家の代表はウォルターである。彼は、「舌頭に説得力が漂い、論理学と修辞学の原理が彼のうちにみごとに混ぜ合されている——しかも、そのうえ、相手の弱点や感情を抜け目なく推し量る才」(一一九)を持った、生れながらの雄弁家である。古めかしい、しかも奇妙な学説、仮説を頭から信じ込み、それをもとに、自分のまわりの様々な事象を理論づけたいという衝動にかられる。そして、他人にはまったく不可解な論理と言葉を用いてしゃべりまくるので、聞き手は呆氣にとられる。

例えば、彼は人の名前はその善し悪しにかかわらず、本人の性格や行動を否応なく偏向させる一種不可思議な魔術的力を持つと信じて疑わない。息子が生れる二年前、トリストラムという一語について論文を書き、自分がその名を

蛇蝎のごとく憎悪する根拠を示す。そして、生れてくる息子の命名に際して、過去の偉大な人物の名を滔々と論じたあげく、エジプトの偉大な学者トリスメジスタスの名を借りることにする。このように、根拠の怪しい滑稽な思いつきを、彼は大まじめに取りあげ、理屈をこね、たとえいかなる天変地異が起ろうとも、頑として自説を曲げようとはしない。

しかも、彼は特異な性格の持ち主で、自説を語る時、本来の目的を忘れて、語る行為そのものに自分を没入させるところがある。「毎日の生活において、自分の才能を示しうる、あるいは、何か賢いこと、機知に富んだこと、鋭いことがいえる機会があれば……ほかに何も望むことはない。」(五一三)たとえそれがどんなに悲しい出来事でも、能弁の種となるかぎり、彼には無上の喜びとなる。

長男ボビーを旅に出すため、旅費を計算している最中に、当のボビー死亡の知らせが入る。ところが、ウォルターは息子の死を悲しむことを忘れ、その場に居合わせた叔父トウビーの嘆きをよそに、記憶するかぎりの死に関する説をあげて、死の恐怖について論じ始める。

わしの息子が死んだって！——ますます結構なことじゃないか。……

生とは何かを知っていて、なお死を怖れる者がいたら見せてほしいね。……

……死が一体何だというのだ？……ちっとも恐ろしいことはない——だって考えてみるがよい、トウビー、——われわれが存在するとき——死は存在しないし——死が存在するとき——われわれは存在しないのだ。……(五一三)

この奇妙な命題を考えてみようとするトウビーは、兄の能弁に圧倒されて、返す言葉が見つからない。

この場合、ウォルターにとって意味があるのは、死そのものを語ることに、死について自説を繰り広げることであ

る。息子の死を悲しみの心をもって受けとめるという現実の行為は、彼には一顧の価値もない。こうして、先の命名論をはじめ、鼻論、教育論等、彼の議論は留まるところを知らず、まったくの詭弁ともいえる言葉の遊戯は続けられていく。そして、観念と言葉にこだわり続けるこの人物は、日常的事物——具象の世界で行動する周囲の人間と際立った対照をなす存在として、読者の目に映るのである。

ところが、現実にはウォルターの持論はことごとく覆される。その経緯がこの能弁家の本質を示唆していて興味深い。四巻十四章で、下女スザナーが生れた赤子の発作による生命の危険を伝え、立ち会いの副牧師に命名すべき名前を早く知らせてほしいと、ウォルターを急ぎ立てる。彼は、瀕死の赤子にトリスメジスタスという立派な名前をつけることを一瞬ためらいはするが、ともかく、下女を先に走らせ報告させる。頭の漏れがひどい彼女にやゝこしい名前を報告させる危険を感じながら、着換えもそこそこに彼女のあとを追う。果たせるかな、彼が寝間着を片手に駆けつけたときには、トリスメジスタスがトリストラムジスタスと変り、さらには、彼が蛇蝎のごとく忌み嫌うトリストラムの名がつけられて、命名式は終っていた。

ウォルターの不運はこれに留まらない。トリストラム受胎の夜、妻が時計のねちの巻き忘れを気にしたために氣勢を殺がれて以来、彼の人生は、「こつち側からあつち側へ——悲しみから悲しみへと移り動く」(四一三十二) 不安定なもので、次から次へと不運な目にあう。スラウケンベルグウスの著作に刺戟されて、見事な鼻論を考え出すが、現実には、息子の鼻が医者者の鉗子にはさまれてべちゃんこにつぶれたために、夢は果敢なく潰え去る。自分の持論がことごとく現実の偶発事件に覆されるウォルターこそ、まさに「挫折の人」であり、失意の人である。彼はたびたび弟トウビーを相手に、自分の不運を啣ち、心やさしい彼の同情を得る。だが、読者にはその嘆きさえも言葉の遊戯と受けとれるのは皮肉なことである。トリストラム命名の一件も、鼻事件も、ともにウォルターを挫折させる不運な出来事ではあるが、同時にそれは、言葉を弄ぶ彼の仮説とその饒舌が不毛であることをいみじくも示しているといえる。

であろう。

3

叔父トウビーはウォルターのように能弁ではない。彼は兄の博識と珍妙な意見に当惑している。兄のように理詰めで考え、論理的に語る事が不得手な彼は、「自分で自分の言葉に聴きほれ」、叔父の話に「のべつ幕なしに割り込む」(二一五)雄弁な下男トリムに代弁させることが多い。だから、兄の話が妙な方向へ偏り始めると、もはやその思考にはついていけず、リラブレロの曲を口ずさみ、話の鋒先をかわし、そのために兄の不満をかきたてている。

だが、トウビーの理詰めという言葉の不足は、感覚的手段によって補われていることに注目すべきである。彼が口ずさむリラブレロの数小節も、単に兄の意見が理解できないための当惑を示す仕種ではない。兄の理論の不条理に呆れ、驚き、それを否定するときに、彼はこれを対抗の表現手段にする。口ずさむリラブレロは、トウビーの様々な思いと意見が込められているのである。

トウビーは感じる人である。至極無邪気で、風変りな道楽に耽けりはするが、物事の本質を的確に感じとることができる良識人である。また、心のやさしい人情家でもある彼は、事あるごとにその心情を示す。ただ、彼は兄のように、自分の行為に説明を加えようとはしない。にもかかわらず、彼の行為の一つ一つが彼の心情を雄弁に物語り、明確にそれを読者に伝えるのである。捕えた蠅を、「この広い世界には、わしとお前が両方とも暮せるだけのゆとりはあるからな」(二一七)、と、いつて放してやる。そのときのこの人情家の仕種に多くの説明は不要であろう。そのほのぼのとした心情は、そのまま読者に伝わり、共感を呼ぶ。

もちろん、ウォルターにも感情はある。心根はやさしい。だから、息子の鼻の一件が知らされたとき、彼は自分の部

屋に駆け込み、取り乱した姿でベッドにうつぶせに身を投げ出し、溜め息をつくばかりで一言も語らない。それは彼の苦悩の姿である。だが、不思議とその苦悩が苦悩として読者に素直に伝わらず、むしろ、その大袈裟な嘆きぶりに滑稽さをおぼえる。この兄弟の仕種が読者に与える効果は極めて対照的である。

具体的な行為におのれの心情を託し、雄弁に語らせるトウビーは、また、具体的な事物を手にするとき、俄然多弁になる。生れながら内気な彼は、ナミュール包囲作戦に従軍した際、鼠蹊部に傷を負ったことで、ますます内気になっている。彼の世話をしているウォルターは、慰みにもなるだろうと考えて、来客があれば相手かまわず、弟の話相手をさせる。内気であるにもかかわらず、自分の傷にかかわる戦いのこととなると、不思議なことに彼は無精に語りたくなる。負傷の経緯を事細かく伝えようとするが、言葉による説明が困難であるとわかると、地図を利用することを思いつく。地図を手にした彼は、さらに細部の研究にとりかかり、より具体的な説明の手立てを求め、ついには、書物に頼る調査だけでは満足せず、中庭に城の模型を作りだす。明けても暮れても考えるのは築城のことばかり、口を開けばナミュールの戦いのことばかり、といったトウビーが、兄とちぐはぐな対話を繰り返すところは、まことに滑稽である。

このように、道楽にすっかりのめり込む点、彼には兄と共通したものが認められる。また、常に包囲戦のことばかり考えている彼の話が誤解を生み、相手を当惑させる結果となるのも、兄と同様である。ただ、言葉にこだわる兄と違って、彼は具体的な行為や事物に依って語ろうとする。その点、彼は兄と著しい対照をなしている。さらに、彼の饒舌は、兄の場合と違って、必ずしも不毛に終わっていない。このことは本人にとって救いとなっており、そのあたりに、この人情家を描く作者の意図を垣間見ることができるとも興味あることである⁴⁾。

ウォルターとトウビーという、まったく異なる世界に身を置く二人の対話は、当然のことながら、噛み合わない。そこに得も言われないおかし味が醸し出されて、それがこの作品の一つの基調となっている。この二人がかかわる話を長々と読者に語り続けるのが、語り手トリストラムである。彼も父や叔父と同様多弁である。自分の生涯と意見を、執拗なまでに脱線を繰り返しながら、いつ果てるともなく語り続ける。だが、彼の多弁は父や叔父のそれとは異質であることにわれわれは気づく。

極めてお人好しで、愚鈍な母は、日常の世界から一步も踏み出すことはない。現実的なことにしか思いが及ばない彼女には、夫が語る言葉は異国のそれも同然で、理解不可能である。こうした日常の世界に住む母と、言葉という抽象の世界に生きる父との間に生まれたトリストラムには、両者の世界がはつきりと見通せるのである。

トリストラムは、ロック同様、言葉が不完全であることを認識している⁹⁾。たとえどれほど多弁に語ってみても、どのように言葉を巧みに操ってみても、なおかつ意志の疎通が欠けることを心得ている。どんな明晰な頭脳も、最高の理解力をも途方にくれさすことのある言葉の曖昧性、その言葉を使って多弁に語ることの不毛性を十分認識した上で、彼は語り続けるのである。

トリストラムの語りの著しい特徴が「逸脱」にあることはいうまでもない。そして、彼は、叔父と同様具体的な事象にもとづいて、自分の出生にまつわる過去の事実、自分の意見を読者に伝えるのであるが、いま一つの特徴として、言葉の羅列が目立つ。過去の記録を語りの素材とした父母の結婚契約書はその典型的な一例である。「本証書はさらに次の事項を証言する。上述の商人ウォルター・シャンディは、同人および上記エリザベス・モリヌーとの間に結ば

れるべき、また、神の祝福によって、十分かつ真実に厳肅なる式をあげ床入りにより完成されるべき上記意図された婚姻と、……」で始まるこの一文は、

……なお上記エリザベス・モリヌーは、随時、本証書において契約同意されたる一または数時期に、上記馬車な
らびに馬匹を平静かつ静穩に賃借し、またその旅行の途次、本証書の主旨とし目的としまた意とするところに従
って、何らの妨害、告訴、面倒、支障、邪魔、追放、障碍、没収、放逐、煩雜、中断、ないし不便なく、自由に
前記馬車に乗車、降車、再乗車することを得るものとする。……（一一一六）

といった調子で、煩雜な言葉を連ね、結婚生活における履行事項、財産、権利に関する諸事項等々、読者の意表をついた、およそ度はずれた言葉の羅列となっている。

この作品が書かれた時期までの半世紀の間、十七世紀以来の力学的、数学的自然解釈を受けついで近代科学は、その専門的精密性を追い、整合を求めるようになった。このことが時代の文明を大きく変質させたのはいうまでもない。人々の考えはますます合理主義に傾き、詩的世界、豊かな人間性を受け入れる世界から離れることになる。さらにまた、この時期に、フランスでは百科辞典派の思想家達が活躍し、英国でも本格的な辞書編纂が始っていた。このことは、人々が言葉というものに深い関心を寄せたことを示している。語彙を収集し、その意味を明確化し、整理、分類、そして、提示するという行為に人々は大きな意義を見出した時期でもあった。先の一文は、そういった傾向の過熱現象に対するからかいであったと考えてよいのではないだろうか。

言葉の羅列による作者の皮肉は、次のように学問の進歩にも向けられている。

こんな具合に——今われわれの眼前に実りつつあるこの学問の大収穫に、ともに力を合わせて働いてきた僚友たちよ——こんな風に偶然の拡大を徐々に積み重ねて、われわれの知識というものは、物理学的、形而上学的、生理学的、論争的、海事的、数学的、神秘的、技術的、伝記的、浪漫的、化学的、産科科学的、その他無数の部門に分れた……各種の知識のいずれもが、最近二百年あまりの間に、次第にその完成の頂点めがけて忍びよって来たのであり、……われわれはもはやその頂点から遠い所にいるはずはないのである。(二—二十一)

しかも、その頂点に達したならば、ものを書くことは終り、ものを読むこともすべてなくなる。やがて、あらゆる知識はおしまいになり、また始めからやり直さなければならない。いいかえれば、完全な元の木阿弥に戻るのだ、という。

トリストラムは、人間が努力を積み重ねて集大成した知識に、このような不信を投げかける。しかも、学問、知識の内容を記述し伝達する言葉を羅列することで、その機能の不完全さ、不確かさをからかっているのである。先の結婚契約書を長々と被露したあと、彼は、「——いや、簡単にいってしまえば——『私の母は、本人がそれを望むならば、ロンドンでお産をしてもよい』ということだったのです」(二—十六)、と本意を明かす。大仰な言葉を連ねた、しかつめらしい契約書が、実際はまことに内容空疎な代物なのだ、と笑いとはず皮肉の刃は鋭い⁽⁶⁾。

トリストラムには多弁は無意味であり、無用である。言葉に不信をいだく彼は、むしろ人の仕種や表情に目を向ける。そしてその中により多くの、より深い意味を読み込むことの必要を読者に示してみせる。例えば、トウビーが以前から憎からず思っている隣家のウォドマン夫人に恋を打ち明けたあと、シャンディ館を訪れた彼女が、トウビーと話をする最中に顔に表わす表情は実に雄弁である。「その場所をはっきりお見せしましょう」とトウビーは彼女にいう。その場所を見せるといふのは、彼がナミュールの戦いで負傷した正確な地点を示さうという意味である。(言

葉の曖昧さのため）感違いした夫人は、夫に選んでも、その傷が結婚生活に支障はないだろうか、しきりに氣を
もむ。

ウォドマン夫人は顔を赤くしました——扉のほうに目を向けました——青くなりました——またすこし赤くなりました
ました——ふだんの顔色をとりもどしました——以前よりもずっと赤くなりました。（九—二十）

トリストラムは、これを次のように翻訳してみせる。

「まあ！ そんなところを見るわけにはゆかないわ——

もし見たら世間は何というだろう？

見たら、私は気絶してしまいわ——

見たらいいんだけど——

見ても別に罪にはならないわ。

——見てみようつと。」（九—二十）

伝達力豊かな表情にたよれば、はしたないと恥じらいながらも、見たい気持を押えかねている夫人の心のゆれが、こ
のように素直に、明確に伝わるのではないか、とトリストラムは読者にいいたいのだろう。

以上見てきたように、トリストラムの饒舌は、観念と言葉の虜になっている父のそののパロディであることがわか
る。作者はこのパロディを通して、思考の厳密さを追求すればするほど、その思考が空転し、多弁に語れば語るほ

ど、観念を伝達する言葉はより不毛になるといふ皮肉な現象を、読者に指摘してみせるのである。彼はより豊かな表現手段を仕種や表情に求める。さらに、それ以上に確実な伝達的手段を、図や色という物的媒体に求めていく。牧師ヨリックのの死を伝える、「ああ、あわれ、ヨリック」の三語と、それに続く黒く塗りつぶされた頁(一一二)には、彼の胸にこもごも迫る万感が込められている。つけ焼刃の知識ではわかるはずがない、と読者に挑戦的に突きつける墨流しの二頁(三三三六)、そして、叔父トウビーの恋の告白に続く空白の二章(九一八・一九)こそ、万言をもってしてもいいつくせないほど多くのことを語り得るのだ。そこには、どれほど賢明な頭を持ち寄っても解明できないほどの、無数の思想や、教訓や、行為や、真理が隠されている。これら黒塗りの、墨流しの、そして、空白の無言の頁が、もともと雄弁に多くのこと語り、「この書物の完全さ、完璧さを増大」(四一二十五)させているのだという主張こそ、この饒舌な作品に込められた作者スターンの最大の皮肉であるといえるだろう。

註(1) 引用文のあとの括弧内の数字は作品の巻、章を示す。なお、訳文に関して、朱牟田夏雄訳(岩波文庫)を参照したことを記して、訳者に感謝の意を表します。

(2) 拙稿『センチメンタル・ジャーニー』における「囚われ」について『文学部記念論文集』(関西学院大学、一九七九)参照。

(3) J. & R. McMaster, *The Novel from Sterne to James* (London, 1981), p. 2.

(4) トウビーの場合、一見無意味に思える築城の行為が、ウォドマン夫人との結婚を実現させる切っ掛けとなっている。その意味で、彼の行為は実りのあるものだといえる。この人物を描くときの作者は、常に同情的で、その優しさを印象づけようとする。作品を通して、作者が読者に訴えようとしていることは、一つには、ややもすれば見失われがちな人間の回復の必要にあったと考えてよいだろう。

(5) 第五卷第七章。ここで作者は、ジョン・ロックの『人間悟性論』第三卷第九章「ことばの不完全について」に言及している。

(6) この他にも、トリストラムの言葉には、「一言でいえば」(二一十七)、「簡単に申しあげると」(九十三)といった表現が目につく。饒舌を承知のうえで、この人物に語り続けさせる作者の皮肉を、これらの語句に読みとることができるであろう。